

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第4号（7月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎ 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス : <http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス : nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和3年度 病虫害発生予報 第4号

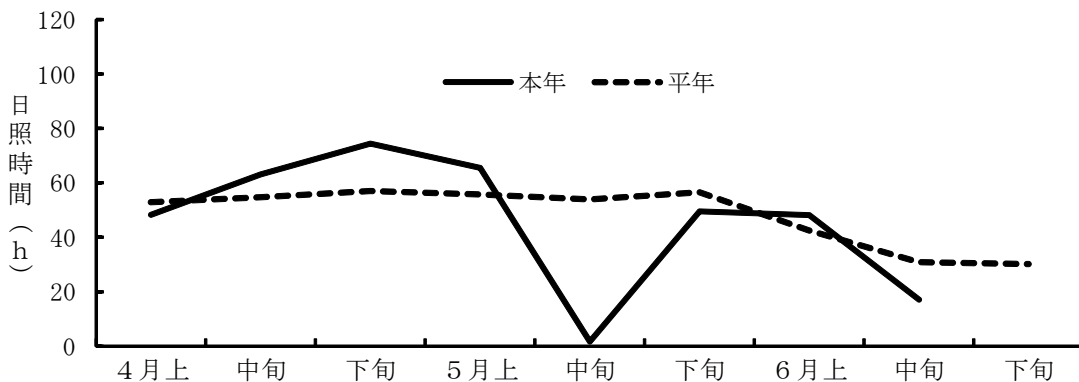
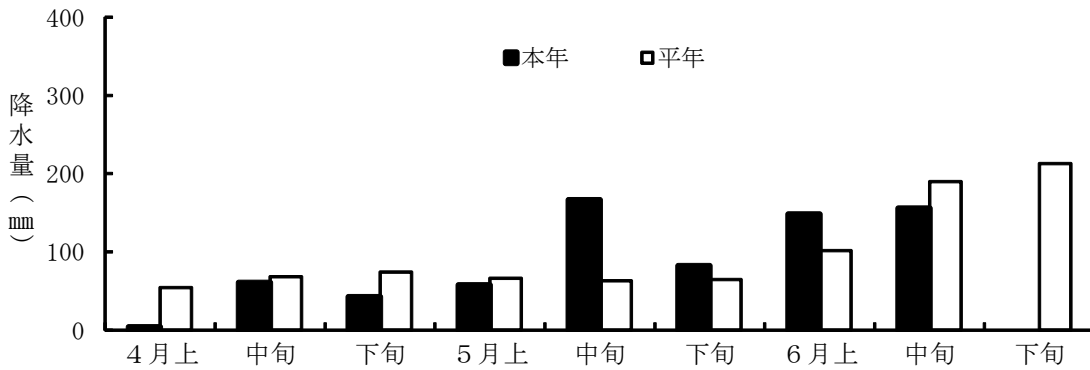
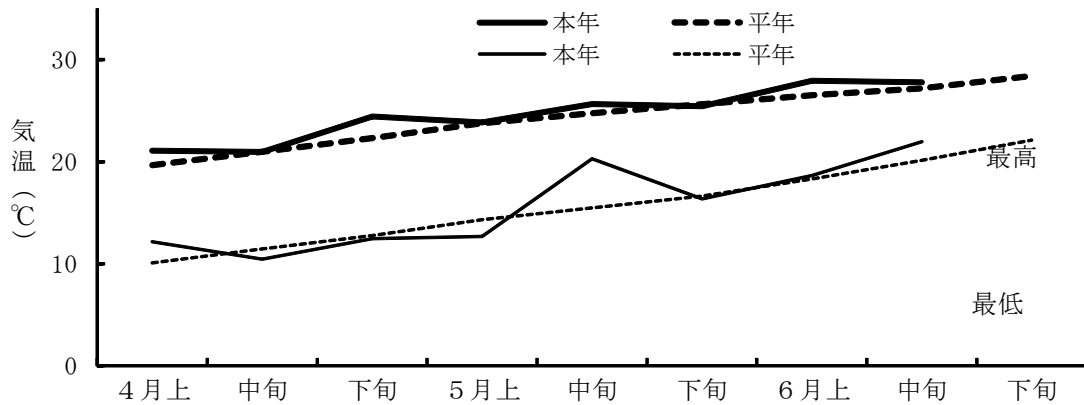
令和3年6月28日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（6月26日から7月25日） 令和3年6月24日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	40	30	九州南部では、気温は平年並み、降水量は平年並みか多く、日照時間は平年並みの見込み。奄美地方では、気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか多く、日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	20	40	40	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	40	40	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	30	30	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	いもち病（穂いもち）	やや多	やや多
		紋枯病	やや多	やや多
		斑点米カメムシ類	少	少
	普通期水稲	いもち病（葉いもち）	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	並	並
		炭疽病	やや少	並
		ハダニ類	やや少	やや少
	サトイモ	疫病	少	やや少
普通作・野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	やや多	やや多
花き	キク（施設）	白さび病（県本土）	少	やや少
		ハダニ類（県本土）	やや少	やや少
		アザミウマ類（県本土）	並	並
果樹	カンキツ	そうか病（果実）（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや多	多
		〃（奄美地域）	並	並
	ナシ	ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		黒星病	やや少	並
茶樹	チャ	ハダニ類	やや多	やや多
		アブラムシ類	多	多
		炭疽病	やや多	やや多
		輪斑病	やや多	やや多
		チャノコカクモンハマキ	並	やや多
		チャハマキ	やや多	多
		チャノホソガ	並	やや多
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
チャノキイロアザミウマ	少	少		
クワシロカイガラムシ	やや少	やや少		

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病（穂いもち）（令和3年度技術情報第10号（6月23日付け）参照）

ア 予報内容

（ア）発生地域 県内全域

（イ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

葉いもちの発生ほ場率32%（平年17%）

：やや高い（+）

（イ）気象予報

降水量：平年並みか多い（+）

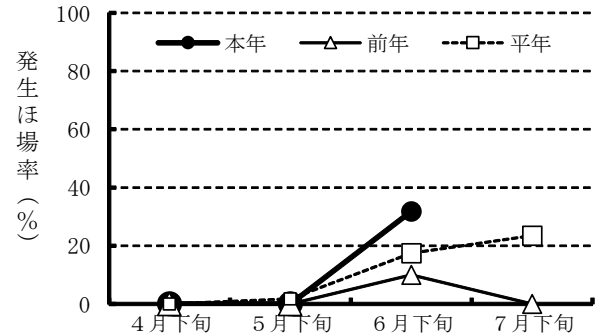
BLASTAMで感染好適日が認められた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期と穂ぞろい期に実施する。

（イ）粒剤による穂いもち防除を行ったほ場でも、出穂後不順な天候が続く場合は、穂ぞろい期に粉剤または液剤による補完防除を行う。

（ウ）防除時期を失しないように注意する。



いもち病の発生ほ場率（早期水稲）

(2) 紋枯病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県内全域

（イ）発生量 やや多

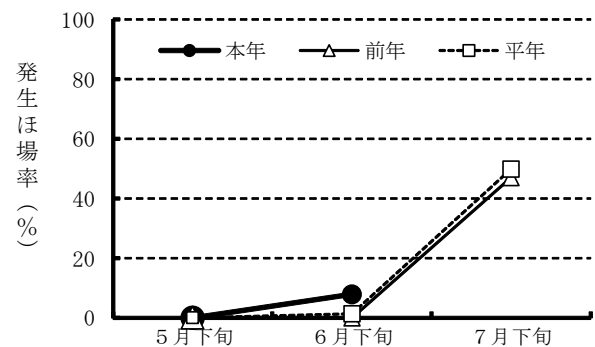
イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率8%（平年1%）：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）発生が認められるほ場において、出穂後も病勢が進展する場合は、液剤または粉剤で防除を行う。



紋枯病の発生ほ場率（早期水稲）

(3) 斑点米カメムシ類（令和3年度技術情報第9号（6月15日付け）参照）

（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ 等）

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生時期 出穂期以降

（ウ）発生量 少

イ 予報の根拠

（ア）早期水稲ほ場周辺の、主にイタリアンライグラスが畦畔雑草化したイネ科雑草地等における斑点米カメムシ類の生息状況について、6月1～4日に捕虫網によるすくい取り調査（捕虫網20回振り）を行った。

(イ) カメムシ類の捕獲箇所率は55.4%（平年（過去5か年の平均，以下同じ）：83.2%）と平年より低く，平均捕獲虫数は3.5頭（平年：15.4頭）と平年に比べて少なかった。

なお，カメムシ類の種別構成比はアカスジカスミカメが最も高く，次いでクモヘリカメムシ，ホソハリカメムシ，ミナミアオカメムシ，シラホシカメムシの順であった。

(ウ) 県全体におけるカメムシ類の捕獲箇所の割合は中程度以上が8.9%で，平年（34.6%）に比べて低かった。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 斑点米カメムシ類による斑点米の混入は米の検査等級格下げにつながり，特に早期水稲では品質低下の主な要因となる。

(イ) 水田周辺の雑草地などが飛来源となるので，出穂の10日前頃までに畦畔の草払いなどのほ場管理に努め，発生密度の低下を図る。

(ウ) 毎年斑点米被害が多い地域では，穂揃期と穂揃期の7～10日後（乳熟後期）の2回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生には十分注意する。

(エ) 防除は農薬の使用基準を遵守し，薬剤が周囲に飛散しないようにする。

2. 普通期水稲

(1) いもち病（葉いもち）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年0.4%）：やや低い

(イ) 気象予報

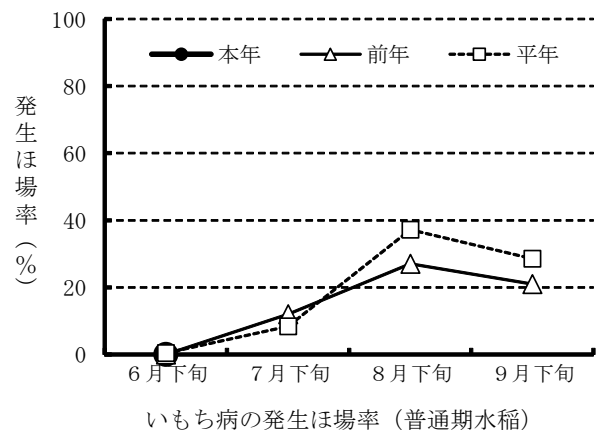
降水量：平年並みか多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 補植用の置き苗は発生源になることが多いので，早めに処分する。

(イ) 常発地や前年発生程度の高かったほ場では十分注意し，発生を認めたら初期防除に努める。

(ウ) 窒素過多は発生を助長するので，各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(2) イネウンカ類およびコブノメイガの誘殺虫数

月・半旬	セジロウンカ				トビイロウンカ				コブノメイガ	
	60W予察灯		大型吸引トラップ		60W予察灯		大型吸引トラップ		フェロモン	
	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年
6・1	4	75	2	1	0	0	0	0	5	54
2	3	6	0	2	0	0	0	0	1	64
3	4	53	1	47	0	0	0	0	0	60
4	30	98	2	26	0	0	0	0	0	100
5	3	6	1	1	0	0	0	0	3	35
合計	44	238	6	77	0	0	0	0	9	313

注) 本年5半旬のデータは，6月21～24日の合算。

最新の誘殺状況は，ホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>) を参照。

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率43%（平年41%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

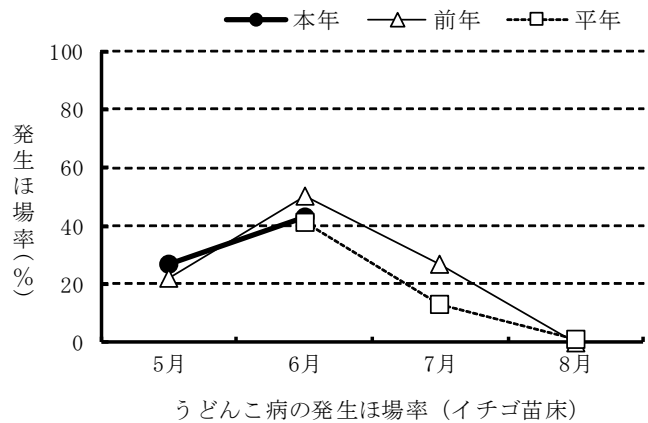
(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し，早期発見と初期防除に努める。

(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し，ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し，葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け，系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年2%）

：やや低い（-）

5月潜在感染確認ほ場率64%（平年42%）

：やや高い（+）

5月潜在感染確認株率 20%（平年9%）

：高い（+）

（5月中旬採集。平年は過去10年間の平均値。）

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い（+）

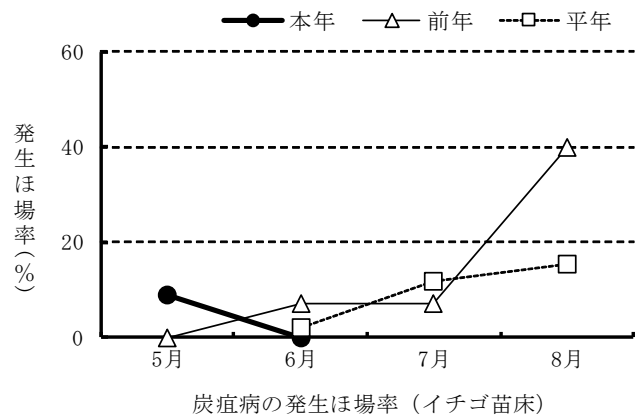
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 苗は十分な間隔を置いて並べ，通風を図る。

(イ) 雨よけ，排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い，適正な水管理に努める。

(ウ) 生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため，早急に除去し，ほ場外で適切に処分する。また，隣接している株も併せて処分する。

(エ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い，株元，ランナー，葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

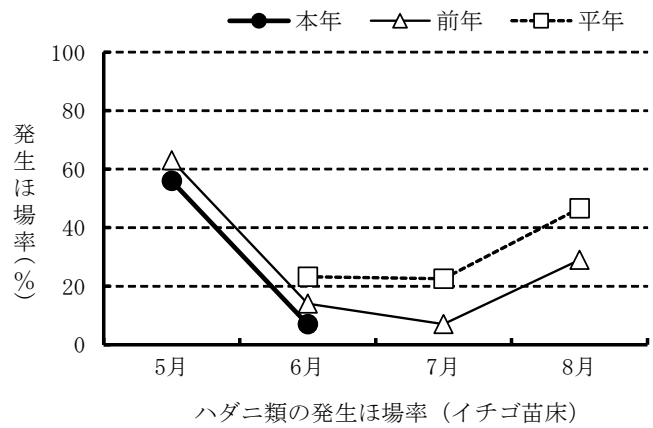
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 7% (平年20%)
：やや低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているのので、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

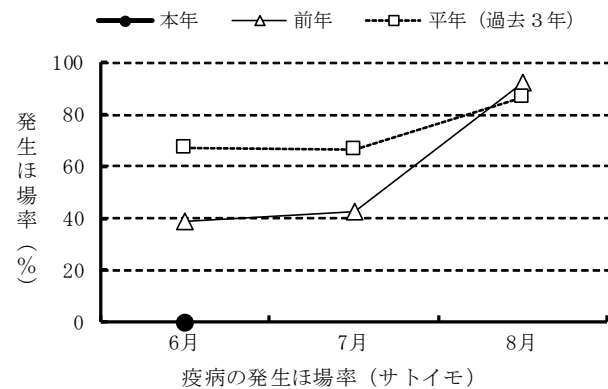
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率 0% : 低い
- (イ) 気象予報
降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病はほ場の額縁部分から初発がよく見られるので、ほ場をこまめに観察し、早期発見に努める。
- (イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、定期的予防散布に努める。
- (ウ) 発生を確認したら直ちに治療効果のある薬剤を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。
- (エ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。



3. 作物・野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サトイモ, イチゴ, サツマイモ, 根深ネギ, キク等
- (ウ) 発生量 やや多

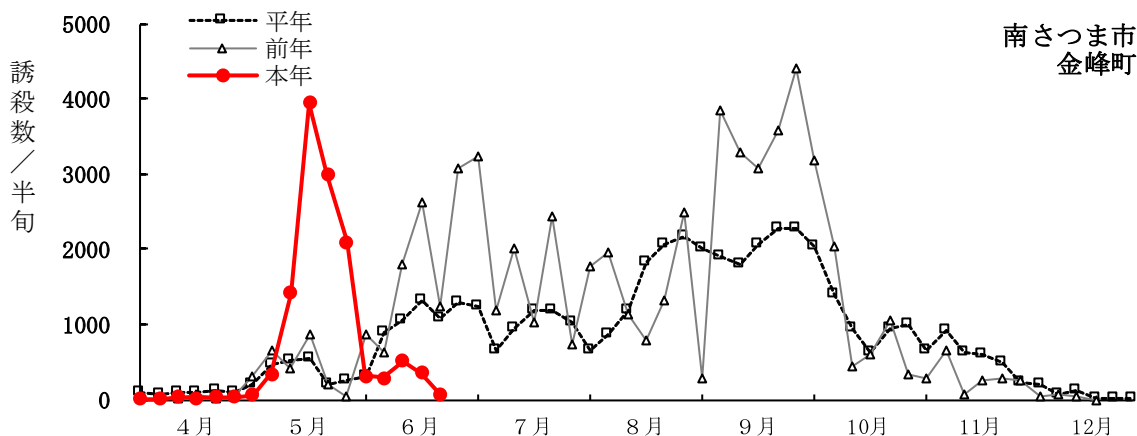
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
5月のフェロモントラップでの誘殺数：多 (+)
6月の発生ほ場率：並

	サトイモ	イチゴ(苗床)	キク (施設)
発生量	並	やや少	並
発生ほ場率	7% (平年6%)	0% (平年0%)	0% (平年0%)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) フェロモントラップでの誘殺数が平年より多く、幼虫の加害時期は早いと予想される。
- (イ) ほ場をよく見回り、幼虫の早期発見に努める。なお、若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、発生を目安となる。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況（6月22日現在）

南さつま市
金峰町

Ⅲ. 花き（キク）

(1) 白さび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土（施設）
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

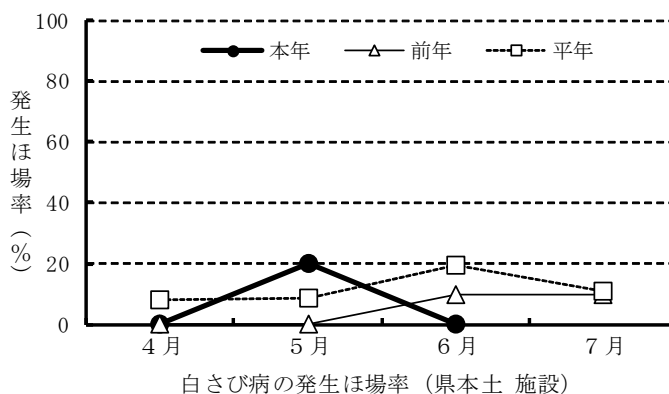
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率 0%（平年20%）
：低い（-）

(イ) 気象予報

降雨量：平年並みか多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。
- (イ) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。
- (ウ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



白さび病の発生ほ場率（県本土 施設）

(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率20%（平年30%）

：やや少（－）

ウ 防除上注意すべき事項

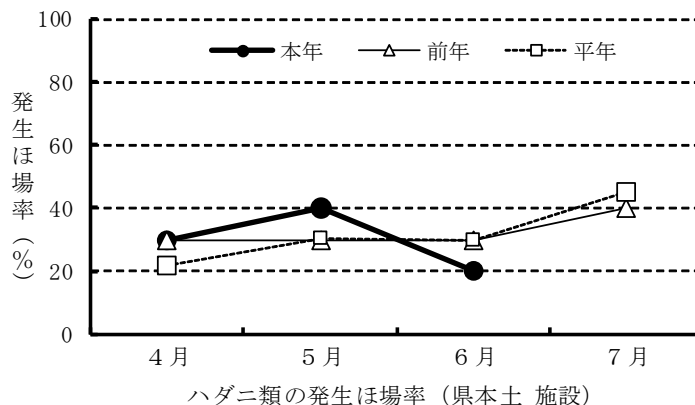
(ア) 出入口や前作での発生場所近く
等でスポット状に発生する場合が

多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年31%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病 (T S W V), キク茎えそ病 (C S N V) を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

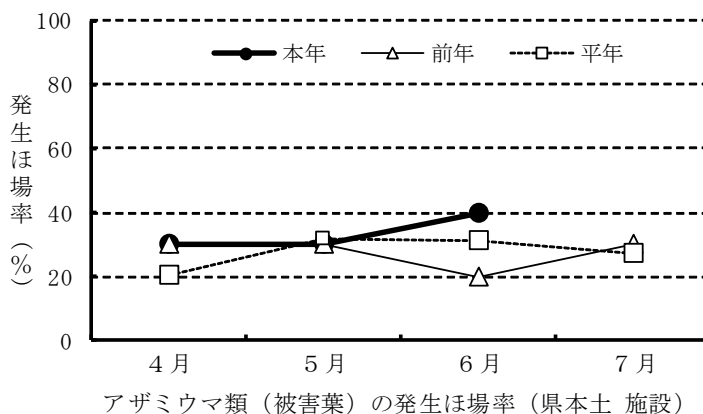
(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。

(オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 (果実) 多

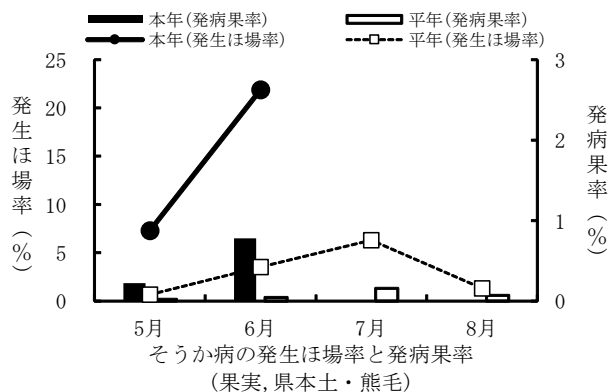
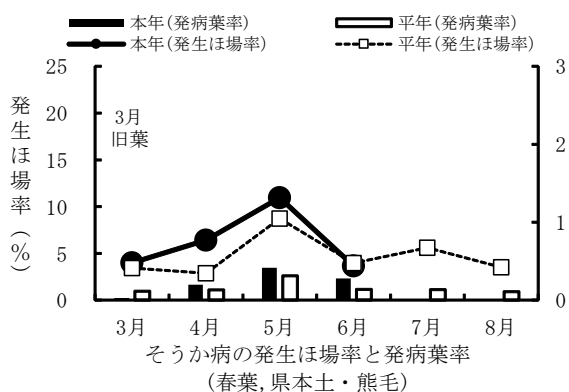
奄美地域 (果実) やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	多
発生ほ場率	4% (平年 4%) : 並	22% (平年 2%) : 高い (+)
発病率	0.3% (平年0.1%) : やや高い (+)	0.8% (平年0.04%) : 高い (+)



(イ) 気象予報

降水量 : 平年並みか多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 6%) : やや低い (-)	0% (平年 7%) : やや低い (-)
発病率	0% (平年0.1%) : やや低い (-)	0% (平年0.1%) : やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉, 発病果は伝染源となるので, ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 降雨により感染が広がるため, 発生の多いほ場では薬剤防除に努める。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 多

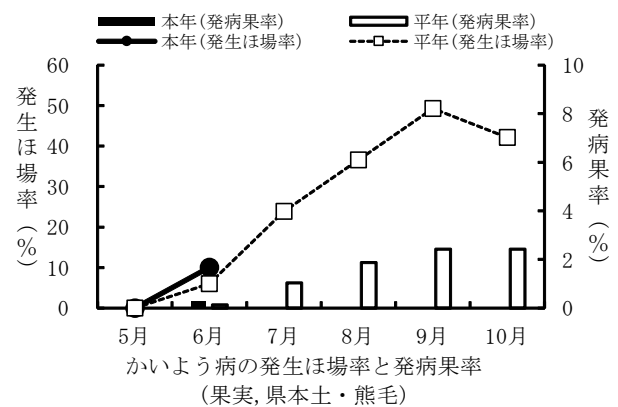
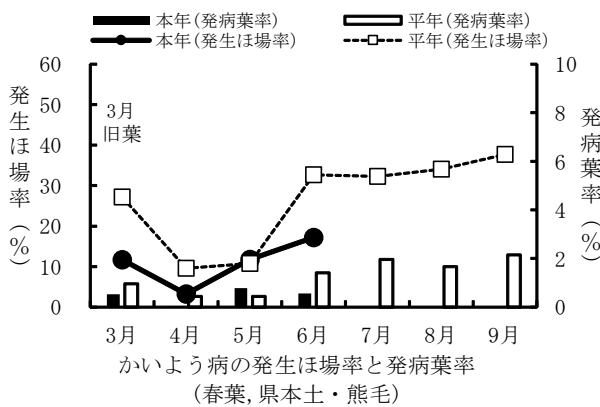
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	少	やや多
発生ほ場率	17% (平年 33%) : 低い (-)	10% (平年 6%) : やや高い (+)
発病率	0.6% (平年1.4%) : やや低い (-)	0.3% (平年0.1%) : 高い (+)



(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	29% (平年 20%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発病率	0.3% (平年0.3%) : 並	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量
県本土・熊毛地域 並
奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

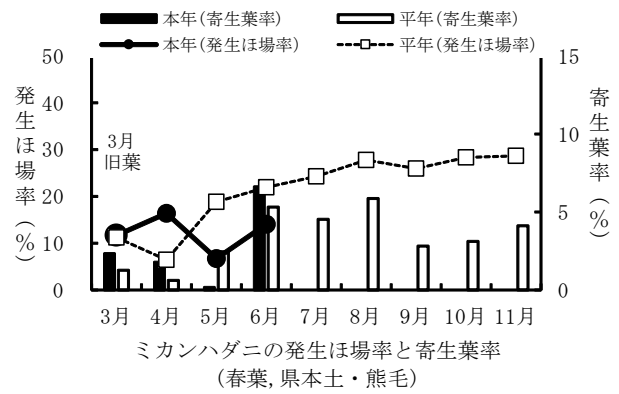
- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：並
発生ほ場率14% (平年23%)
：やや低い (-)
寄生葉率6.6% (平年5.3%)：並
発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：並
発生ほ場率0% (平年1%)：並
寄生葉率0% (平年0.04%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。
- (イ) マシン油の散布は、早生・普通温州では7月上旬まで、ポンカン及びタンカン等の中晩柑類では7月下旬までとする。



2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

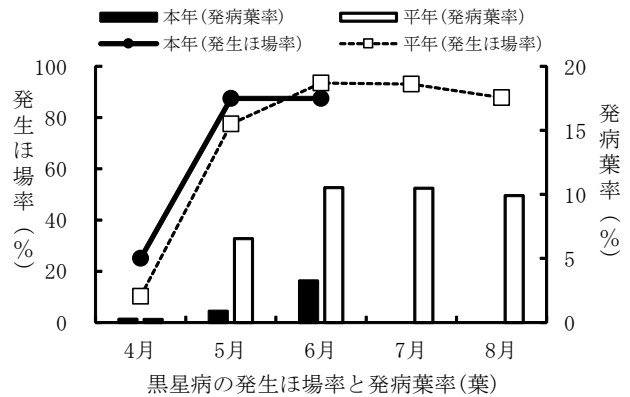
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率88% (平年94%)
：やや低い (-)
発病葉率3.3% (平年10.5%)
：やや低い (-)

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病果および発病葉は、伝染源となるのでほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 防除は新梢伸長期までを重点に、予防散布を行う。なお、薬剤散布は天気予報に留意し降雨前に行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率38% (平年21%)

: やや高い (+)

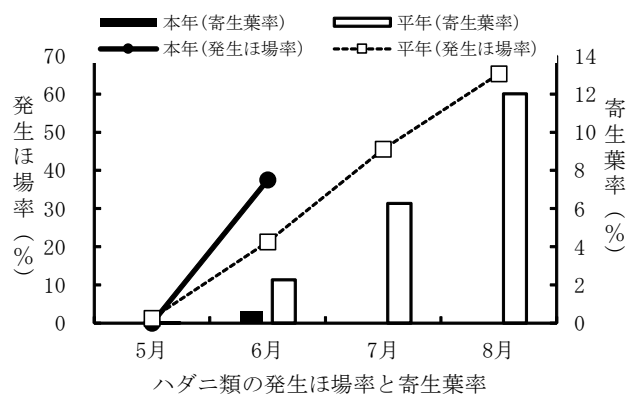
寄生葉率0.6% (平年2.3%)

: 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤による防除は発生初期に行い、葉裏や徒長枝にもかかるよう十分量散布する。

(イ) 抵抗性の発達を防ぐために、同一薬剤、同一系統の薬剤の使用は年1回とする。



(3) アブラムシ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50% (平年8%)

: 高い (+)

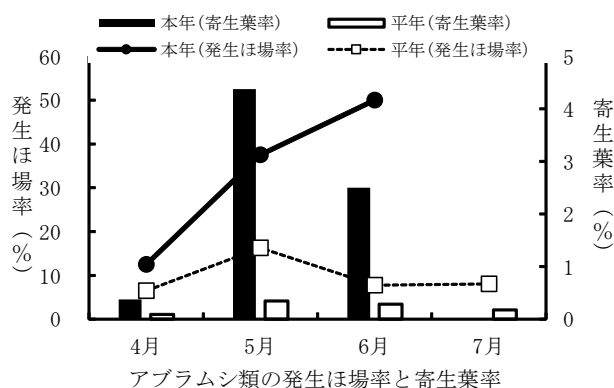
寄生葉率2.5% (平年0.3%)

: 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 園地によって発生量に差がみられるので、発生状況をよく把握して防除を行う。

(イ) 薬剤散布が遅れると縮葉するので、早期防除を心掛ける。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。

イ 薬剤散布間隔は、散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。

ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 成虫は5月下旬から発生し、6月上旬～中旬が羽化最盛期になる。

イ 産卵は6月中旬頃から始まり7月上旬が盛期で、8月まで続く。

ウ 朝夕、成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。

エ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断(ストックカバー法)すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

時 期	5 月			6 月			7 月			8 月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生 態	← 成虫発生期			→ 産卵期			← 幼虫食入期			→		
物理的 防除法	← 成虫の捕殺			→ 卵の圧殺・幼虫の捕殺			←			→		
生物的 防除法	↓			バイオリサ・カミキリ施用			←			→		
薬 剤 防除法	←			殺虫剤散布			←			→		

注) 県本土の発育ステージを示す。

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 予察灯での誘殺虫数は平年よりやや少ない (表 1, 図 1)。各予察灯での最新の誘殺虫数はホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>) を参照。

イ 餌植物 (ヒノキ) の球果は, 県本土でやや少～中程度の着果量で, 平年並みであった (表 2)。南薩は平年よりやや少なく, 北薩・始良は平年よりやや多かった。新成虫の発生動向に注意が必要である。

ウ 果実が吸汁されると, カンキツでは果汁が抜けてスポンジ状となり, 落果する。ナシでは奇形果や果汁が抜けてスポンジ状となる。

エ 飛来を認めたら直ちに防除し, 薬剤は比較的残効の長いネオニコチノイド系薬剤または合成ピレスロイド系薬剤を選択する。合成ピレスロイド系薬剤は, ハダニ類の発生を助長する可能性があるため, 散布後はハダニ類の発生に注意する。

オ 防除にあたっては, 薬剤の使用回数や使用時期に注意する。

表 1 各予察灯での誘殺虫数, 6 月第 1～4 半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ		チャバネアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	9	727	10	151
いちき串木野市湊町	0	115	0	48
出水市美原町	21	1,216	27	932
鹿屋市串良町	22	194	3	29
誘殺虫数	やや少 (－)		やや少 (－)	

注1) 平年は, 過去10年間の平均。

2) 予察灯の光源は, 南さつま市金峰町は水銀灯100W, 鹿屋市串良町は捕虫灯20W, 他は捕虫灯40W。

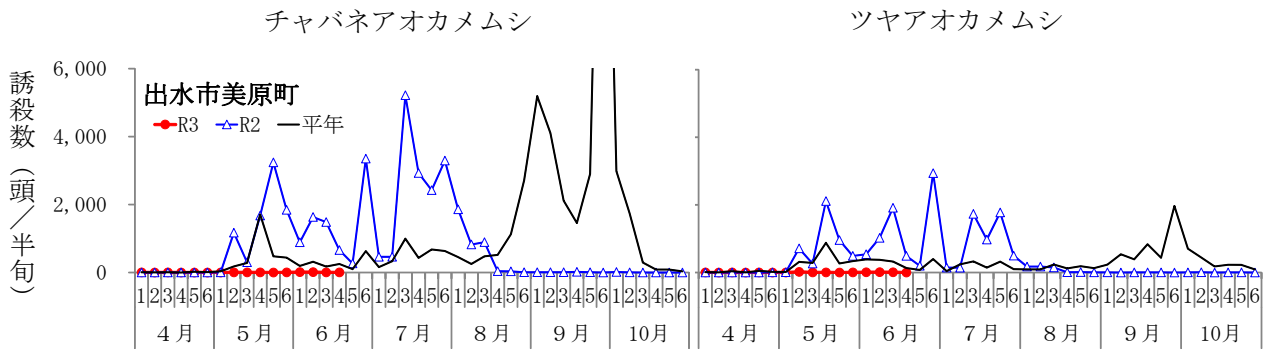


図1 出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

表2 餌植物（ヒノキ）の球果量指数

調査地域	本年	平年
南薩	30.2	43.3
北薩	56.0	43.3
始良	54.3	43.3
大隅	38.1	38.8
平均	45.8	43.1

- 注1) 球果量は目視による遠観調査（ヒノキ29地点），評価は7段階（極多, 多, やや多, 中, やや少, 少, 極少）
 2) 球果量指数は愛媛県（2018）による。球果量が多いと指数が高く，少ないと指数が低くなる
 3) 球果量指数： $((\text{極多地点数} \times 7) + (\text{多地点数} \times 6) + (\text{やや多地点数} \times 5) + (\text{中地点数} \times 4) + (\text{やや少地点数} \times 3) + (\text{少地点数} \times 2) + (\text{極少地点数} \times 1)) / (\text{総地点数} \times 7) \times 100$
 4) 平年は，2011～2020年の10年間の平均

V. 茶 樹

(1) 炭疽病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

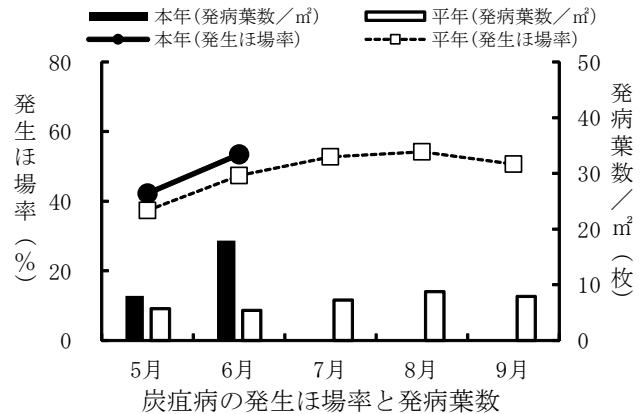
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
 発生ほ場率53%（平成47%）：並
 1㎡当り病葉数17.9枚（平成5.4枚）
 : 多 (+)

(イ) 気象予報

降水量：平成並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病に弱い品種や多発ほ場では、萌芽～1葉期に予防防除を行う。
 (イ) 降雨が続き既に感染が予想される場合は、治療効果のある薬剤で防除する。
 (ウ) 三番茶期は萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）を厳守する。
 (エ) 更新園では、裾部に残った病葉が伝染源となり梅雨末期に再生芽へ感染するため、1～3葉期に予防効果のある薬剤で防除する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

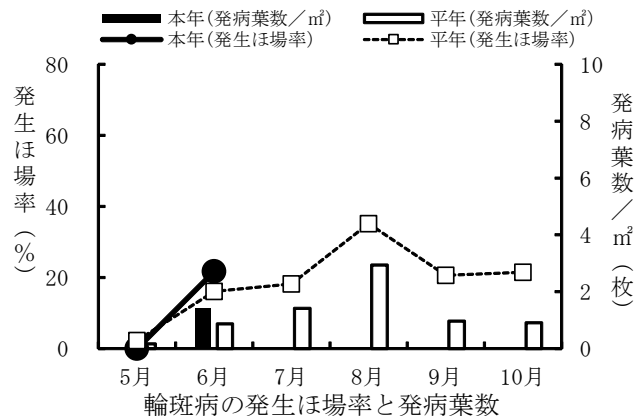
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
 発生ほ場率22%（平成16%）
 : やや高い (+)
 1㎡当り病葉1.4枚（平成0.9枚）
 : やや多 (+)

(イ) 気象予報

降水量：平成並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。
 (イ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。
 (ウ) 本病に弱い品種では、更新園においても再生芽の整枝直後に薬剤防除を行う。
 (エ) QoI剤耐性菌の発生が確認されているほ場では、本系統薬剤の使用を避け、耐性菌未発生のほ場でも、QoI剤の使用は年1回とする。



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	やや多
	チャハマキ	多
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	早い
	チャハマキ	早い

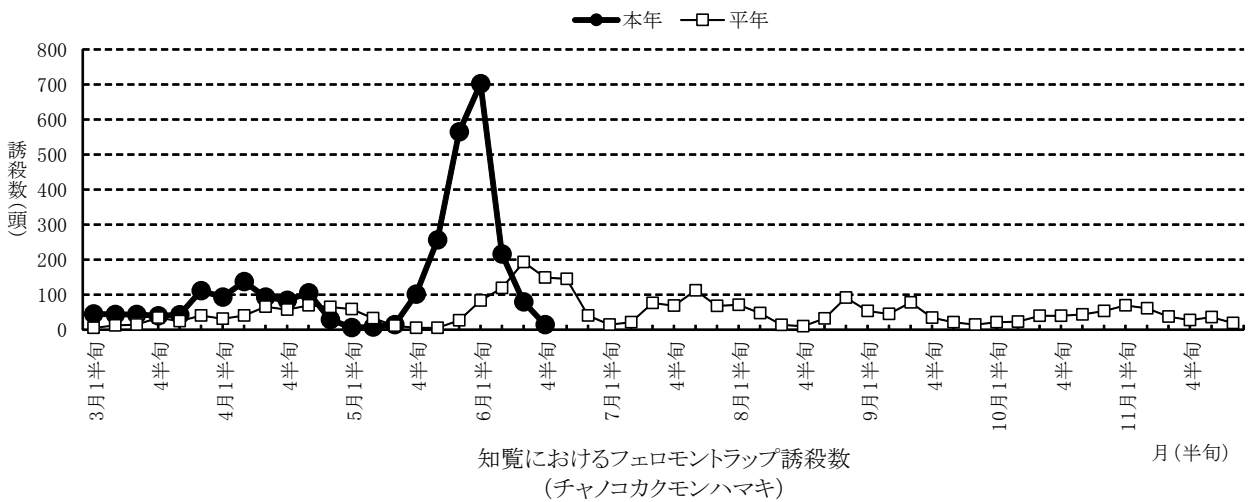
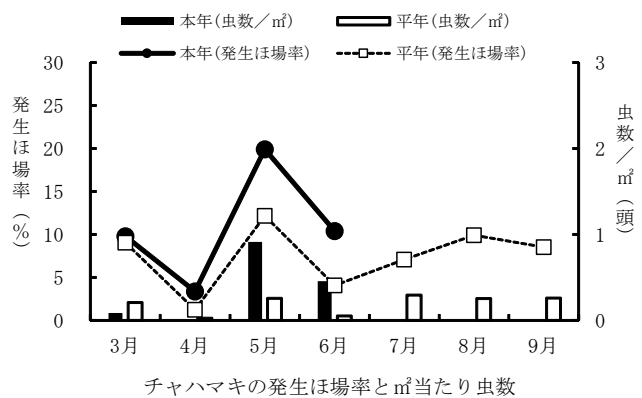
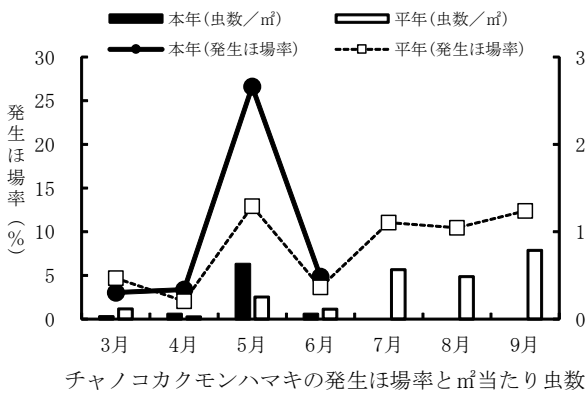
イ 予報の根拠

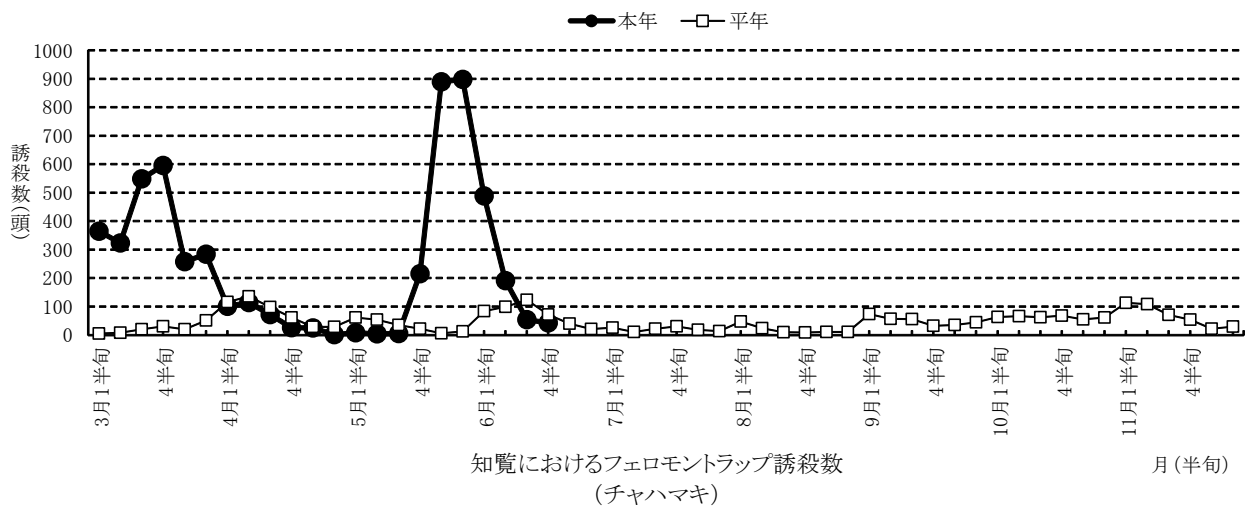
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	並	やや多
発生ほ場率	5% (平年 4%) : 並	10% (平年 4%) : やや高い(+)
虫数(1㎡当たり)	0.06頭 (平年0.1頭) : 並	0.5頭 (平年0.05頭) : 多(+)
【知覧町フェロモントラップ】		
誘殺数(5月1半旬~6月4半旬)	1,960頭 (平年681頭) : 多(+)	2,796頭 (平年571頭) : 多(+)
第二世代の発蛾ピーク	早い	早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 薬剤防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期(発蛾最盛日の10～15日後)である。





(4) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多
- (ウ) 発生時期 やや早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並

【巡回調査】

発生ほ場率13% (平年14%)：並
 m²当たり巻葉数 1.6枚 (平年0.5枚)
 : 多 (+)

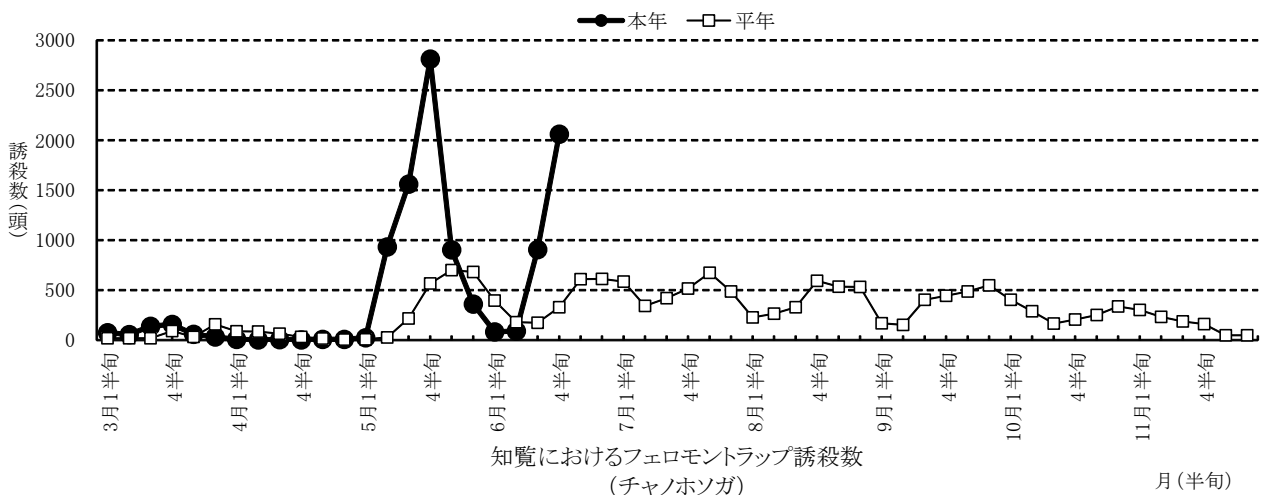
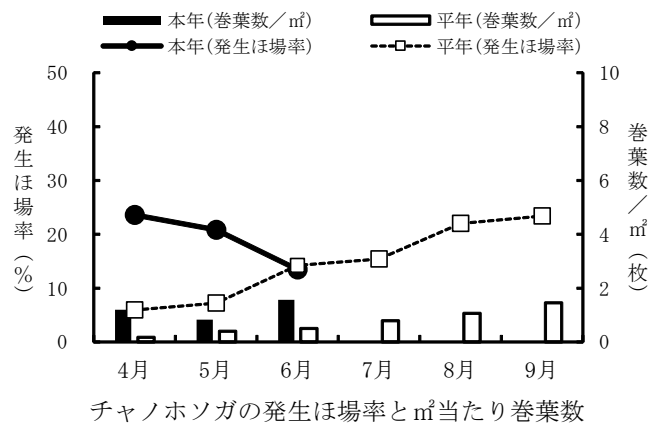
【知覧町フェロモントラップ】

誘殺数 (5月1半旬~6月4半旬)：9,734頭 (平年3,274頭)：多 (+)

第二世代の発蛾ピーク：やや早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は三番茶萌芽～1葉期に行うが、摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）を厳守する。
- (イ) 薬剤は、葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認してから散布すると効果的である。
- (ウ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
 チャノキイロアザミウマ 少

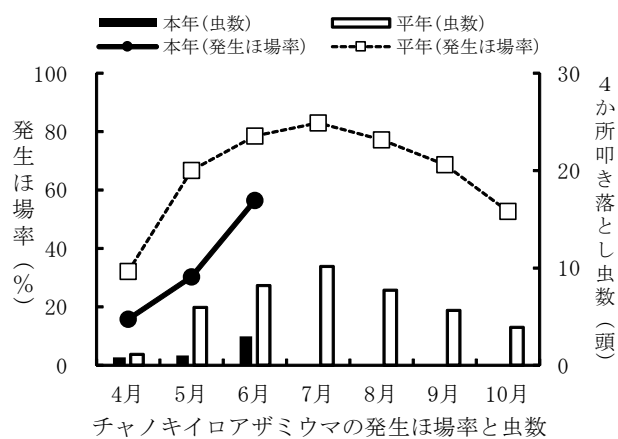
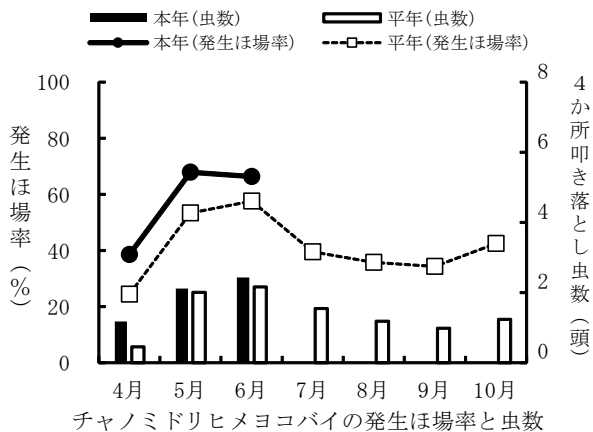
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	少
発生ほ場率	66% (平年 58%) : やや高い (+)	56% (平年 78%) : 低い (-)
虫数 (4か所叩き落とし)	2.4頭 (平年2.2頭) : 並	3.0頭 (平年8.2頭) : 少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。



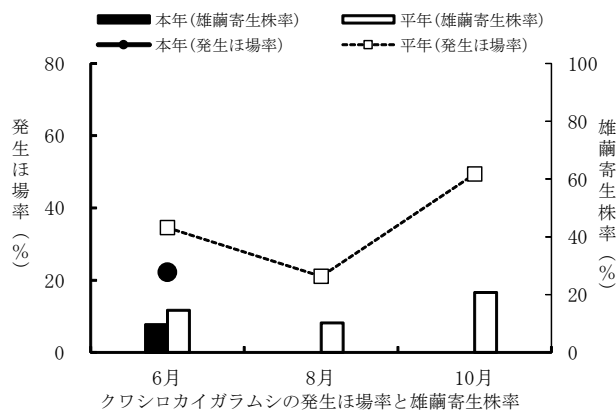
(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率22%（平年35%）
：やや低い（－）
雄繭の寄生株率9.6%（平年14.6%）
：やや低い（－）



(イ) 有効積算温度による防除適期（第二世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期	
	本年	(参考) 前年
枕 崎	6月27日	7月5日
加世田	6月27日	7月8日
溝 辺	7月17日	7月22日
鹿 屋	7月3日	7月10日
志布志	7月5日	7月11日

注1) 予測には各地のアメダス観測地点における本年の日平均気温を用い（6月22日まで）、6月23日以降は各観測地点の平年値を用いた。

注2) 有効積算温度は、各地のアメダス観測値より算出した第一世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。
- (イ) 薬剤は、ふ化最盛日から5日以内に枝や幹に十分かかるように散布する。
- (ウ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく、高い効果が期待できる。

防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

県内全域で発生がみられ、一部で多発ほ場も確認されている。多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

- (1) 深刈り更新は、寄生葉が除去され密度低下が期待される。
- (2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。
- (3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。